東京大学 本郷キャンパス建築群（安田講堂ほか）

携わる人が変わっても、建築が残る判断がされる仕組みをつくり実践している。

所在地：東京都文京区本郷　**設計**：内田祥三、岸田日出刀／改修 キャンパス計画室（千葉学）、香山壽夫ほか　**構造**：RC造地上5階地下1階／改修後RC造一部S造地上5階地下1階ほか
建築面積：1,539.00m^{2}ほか　**延床面積**：6,988.00m^{2}ほか　**竣工年**：1925年／改修2014年ほか

インタビュー
西村幸夫 Yukio Nishimura
東京大学教授・キャンパス計画室 前室長

安田講堂の外観。周辺の通路、植栽なども建築に合わせて整備されている。

安田講堂の内観。トップライトや光庭に面した窓など2014年の改修で復原された。

工学部1号館の内観。建築学科の製図室が中庭部分に増築された。

——名建築を所有するというのはどのようなことでしょうか？

大学のアイデンティティですから、大学キャンパスに建つ建築はどのようなものであるべきかを考えるよりどころになっています。かつては安田講堂の周りに高い建物が建ちましたが、今はそうした計画はありません。

——関東大震災の復興期の本郷キャンパスの特徴を教えていただけますか？

明治時代の初期のキャンパスは、複数の大学が本郷に移ってできた総合大学でした。ある時から正門前の広い中庭を挟んで各大学が建ち並び、校舎が増えて敷地に余裕がなくなってきたころ、安田講堂の建設中に関東大震災が起こりました。木造や煉瓦造の校舎の多くが被災し、復興期に建てられた複数の建物は、内田祥三先生が自ら1/200の縮尺の図面を描かれています。広場型から街路に面して鉄筋コンクリートの建物が建つ街路型に変わり、正門と安田講堂がつくる軸と図書館前から伸びる軸で十文字の形式となる現在の形に転換しました。

——名建築を所有することでのご苦労とは何でしょうか？

床面積を増やしたいという要望はつねにあるのですが、大学としての統一感を守ろうとすると、部局（＝学部・研究科・附置研究所・全学センター）の要望と対立するので、内部的に苦労しながら全体の価値を守っています。維持や改修をするためには余分にお金がかかりますが、建物を守ることだけが大学の使命ではないので、教育や研究にかけるお金とどうバランスをとるのかが難しいところですね。

——古い建築を残す仕組みを教えてください。

本郷キャンパス計画要綱を定めています。エリアコードのIからIVまでのゾーニングで保存から開発を許容する4段階に分けて、高さやデザインの規制をしています。また、改修や新築など事業の立案段階と基本構想、基本設計、実施設計の段階でチェックしますが、さらに各エリアコードと実施内容で、総長が確認するAから部局だけで確認できるDまで4段階で重要度を分けてマトリックスで示しています。また、保存建造物1種、2種を指定し、外部空間も歴史的空間1種、2種を指定して厳しくチェックしています。

——キャンパス計画室はどのようなことをしていますか？

現在の仕組みは、内藤廣先生がキャンパス計画室長だった2009年ごろに整備されました。国立大学法人化後、寄付で新しい建物をつくる際に部局が強い意見を持ち、キャンパス内にあまり望ましくない建物が増えてきたので、このような手続きが整えられたのです。キャンパス計画室では、文系も含めた准教授以上のメンバーが集まり月1回の会議を行い、大きな建物の基本構想から、サインのデザインといった細かいものまで、毎月5～10個ぐらいの案件すべてをチェックしています。

——最先端の研究と古い建築との共存をどのようにお考えでしょうか？

工学系ではドラフトチャンバーや水を使う実験室といった要望がありますので、既存の建物にかなり手を入れないといけません。医学部では最新の機器を入れたり、病院との関係も出てきます。建築学科などの工学部1号館では1998年に中庭に製図室をつくり、法学部3号館は2012年に中庭に書庫と研究室のタワーを建てました。化学専攻などの工学部3号館は保存建造物2種の指定でしたが、換気設備の問題や危険物倉庫があるので、2013年に外観をほぼ復元して建て替えたのですね。それまでは、残すかモダンなものにするかのどちらかでしたが、違う解決方法がとられました。2014年には安田講堂を耐震補強しつつもとの姿に近い形で整備し、2016年現在、図書館の改修中で、図書館前の広場の地下に新しい機能を付け加えながら、広場の噴水をもとに戻して、もとの建物の大階段を守り、トップライトを復原しようとしています。

——この建築群の未来をどのようにお考えですか？

キャンパスの軸構造とオープンスペースはずっと守っていかなければいけません。かかわる人が変わっても同じ判断ができる仕組みを続けなければいけないと思います。

——未来に残るべき名建築とは何でしょうか？

それぞれの人生と建物の一生が交錯する時に、思い出深く記憶できるものが名建築だと思います。どこかに向かうシークエンスのなかで人と建物は出会うので、その建築が適切な場所に置かれ、外部空間にうまく溶け込み、全体とマッチしていることが、建物の質の高さと並んで大事ではないでしょうか。

2016年12月6日、東京大学にて
聞き手・文＝いしまるあきこ
写真＝蔵プロダクション